

個性と普遍性：写真家としての福原信三

2023年3月8日

東京大学生産技術研究所

戸矢 理衣奈

経歴の特色

- 文系のバックグラウンド（東京大学文学部社会心理学科卒業、同大学院総合文化研究科、国際日本文化研究センターなどで学ぶ
- 著書に『下着の誕生：ヴィクトリア朝の社会史』（講談社選書メチエ）
『銀座と資生堂：日本を「モダン」にした会社』（新潮選書）
など
- 10年超の実務経験（（独）経済産業研究所、(株)IRIS代表取締役等）
- 社会人を対象に、文理を超えて全領域160コマを学ぶ
東大EMP(エグゼクティブ・マネジメント・プログラム)を受講
- 2019年1月に東京大学生産技術研究所に着任
「応用人文学」を担当



東京大学生産技術研究所

- 「工学」のほぼ全領域をカバーする
日本最大級の大学附置研究所
- 「文化をめぐる人文と工学の研究グループ」



東京大学
生産技術研究所
Institute of Industrial Science,
The University of Tokyo



フォーラム・「生産研究」



音楽の可能性
 SHIBUYA QWS [渋谷キューブ]
 - QWS アカデミア -
 2021/20 start 15:00 - end 18:30



岡田 暁生
 京都大学人文科学研究所 教授 / 西洋音楽史



合原 一幸
 東京大学 特別教授・名誉教授 / 数理工学



宮崎 徹
 東京大学大学院医学系研究科 教授 / 分子病態医科学



工学とリベラルアーツ
 今こそリベラルアーツとしての工学が必要だ。
 2022年 3月23日 16:00 18:30



「生産研究」72巻5号、73巻4号、74巻3号 毎年、文化と工学の特集号を刊行
 生産技術研究所HPでも公開中

福原信三(1883—1948)



- 資生堂初代社長(創業者の三男)
- 欧米留学および遊学後、資生堂に経営参画。化粧品事業への参入を決定
- 1923年より、ボランタリーチェーンストア制度による全国展開を開始
- 「東京銀座資生堂」銀座と密接に関連したイメージの確立
- 写真家として活躍。日本写真史に足跡をのこす

本日の構成

「個性と普遍性」

序・福原有信と福原信三

1・福原信三の経営理念:

「すべては環境が支配する」

2・福原信三とその時代背景

3・意匠における「資生堂調」の確立

4・写真家としての福原信三:

「個性」と「普遍性」をめぐる問い:



創業者 福原 有信(1848-1924)

- ・安房国出身。幕府医学所を経て大学東校で学び海軍病院薬局長に
- ・1872年(明治5年)、日本初の西洋調剤薬局として資生堂を創業。創業の地、京橋区出雲町(現在の銀座七丁目)は、日本初の西洋風街区として造営がすすむとともに、鉄道開通により、新橋のお膝元として発展を期待されていた。
- ・社名は「易経」の一節「至哉坤元 万物资生」による

- ・医薬分業の魁
- ・“漢方医の領分を侵食”



福原 有信(1848-1924)の後半生

資生堂も当初、経営難に陥った。

⇒有信の「本業」は帝国生命に。

近代的な薬事、保険制度の整備に尽力。明治の実業家として大成。

- ・1882年より**帝国生命保険株式会社**に参画、
のちに社長(日本で二番目に設立、
現・朝日生命保険相互会社)
- ・**大日本製薬会社** 設立に参画
(現・大日本住友製薬会社)
- ・**全国薬剤師連合会** 会長
- ・赤十字社評議員
- ・日本電力株式会社取締役



等、公職多数

有信一家(1888年頃)

帝国生命のあと
は母任せ

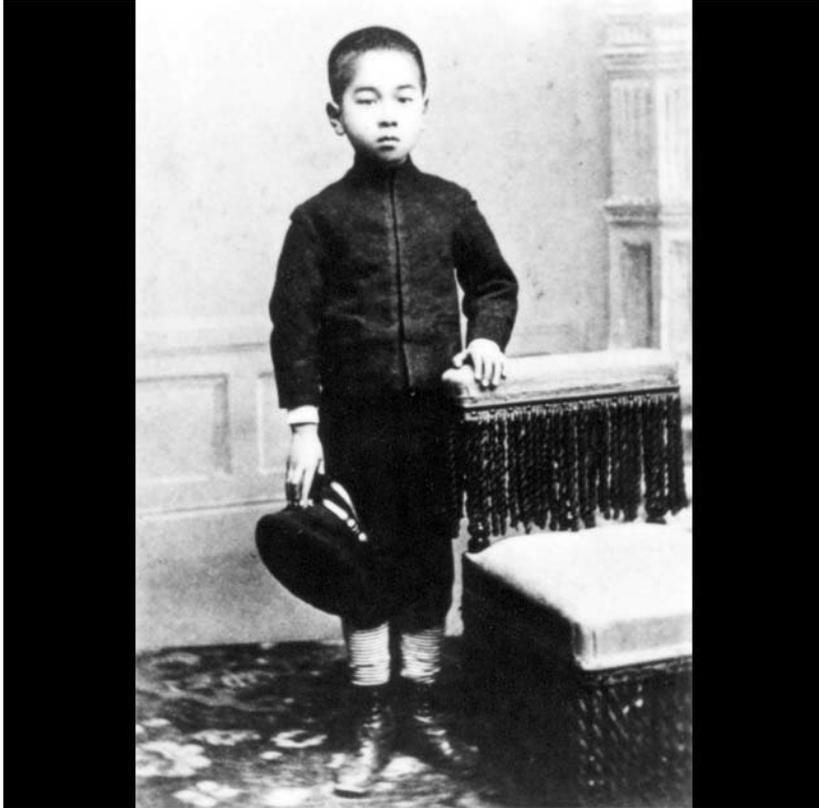


当時の資生堂製品

- 「昔風の薬屋さん」
- とく夫人の辣腕経営 「三大賢婦人」
- 福原衛生歯磨石鹸(1888年)、ペプシネ飴、脚気丸
- 初の化粧品「高等化粧料オイデルミン」(1897年)



福原 信三 (1883-1948) “明治の第二世代”



- ・裕福な家庭で西洋文化に親しみながら成長
- ・「文明開化」として、西洋諸制度の導入に従事した第一世代よりもずっと高い西洋文化への審美眼、批評精神
- ・私費留学者も増え、日本文化をめぐる独自性、普遍性の問題に直面

信三 (1883-1948) の同世代人

- ・谷崎潤一郎 (1886-1965)
- ・永井 荷風 (1879-1959)
- ・武者小路実篤 (1885-1976)
- ・有島 武郎 (1878-1923)

- ・藤田嗣治 (1886-1968)
- ・北大路魯山人 (1883-1959)

※魯山人は岡本かの子「食魔」(グウルメ)の
モデル

※夏目漱石「それから」主人公の“高等遊民”長井代助 “趣味の審判者”(アービター・エレ
ガンシャルム)

※ココ・シャネル、ケインズも信三と同年生まれ

本日の構成

「個性と普遍性」

序・福原有信と福原信三

1・福原信三の経営理念:

「すべては環境が支配する」

2・福原信三とその時代背景

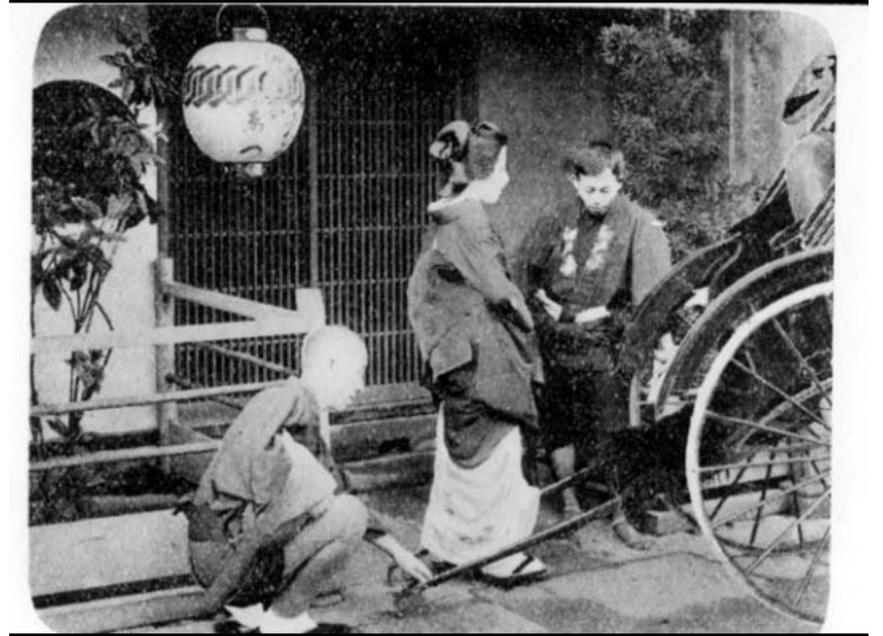
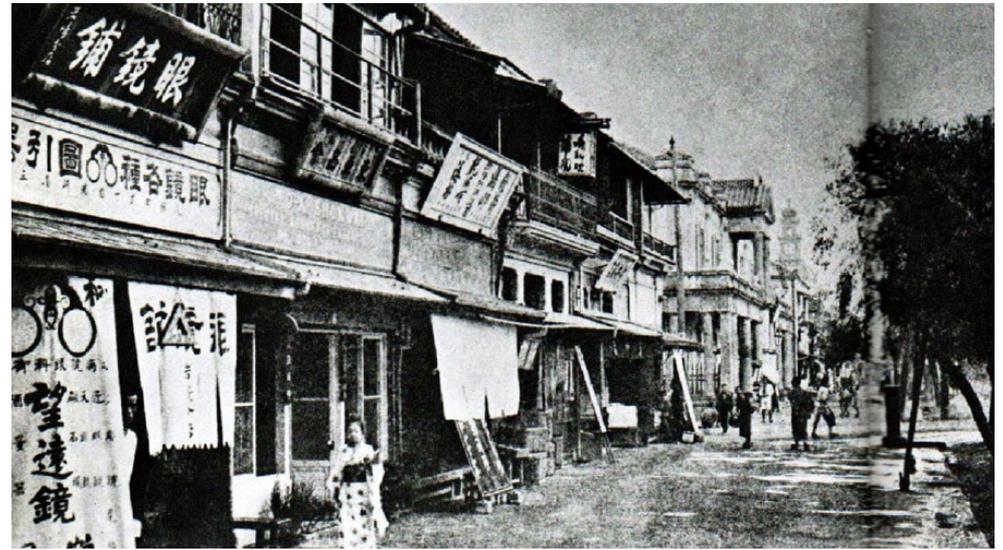
3・「資生堂調」の確立

4・写真家としての福原信三:

「個性」と「普遍性」をめぐる問い



銀座(1905年)および新橋(1912年)



経営参画時に抱いた、留学経験に基づいた課題

欧米の首都の繁栄を経験し、個性豊かな西洋婦人と接してきた信三、ショックを受ける

- 日本女性の「個性化」
- 「総て環境に支配される」



画像: ポーラ文化研究所HP

■ 日本女性の個性化



【化粧上手な仏米の婦人
百人百様の法で特長を発揮す

日本婦人は一番化粧好きで而も下手】

日本女性の無個性を嘆いて長文記事に...

読売新聞1917年2月21日朝刊

信三のインタビュー記事

「女性の個性化」 1920年前後の資生堂製品



「婦人を極度に束縛したのは日本婦人における和服と、支那婦人の纏足が兩大関(略) 私は服装ばかりでなく完全に二重生活からの解放を欲しますが、しかしそれには先づ畳への執着を去るべきではないかとひそかに考へて居ります」

美容三科の開設(1922年)

- 美髪科、美容科、子供服科を開設
西洋式のライフスタイルの発信
- ギャラリーでのパリの服飾雑貨や
子供洋服の製造販売なども

“日本結髪史の大
改革”
「耳隠し」



資生堂月報～「女性の個性化」の精神的支柱に



- 「近代の美くしさは静止した人形的な美くしさよりも、ゆとりある動く表情の美くしさです」
- 「あなたが洋装された時には(略)親の敵を忘れても、大股で足を真すぐに、歩かなければなりません」「足は歩くためにあるのである」
- 「撰ばれた人でなければならない。先覚者でなければならない」

洋風ライフスタイル、新しい女性像を提案し、銀座に「モダンガール」の登場を導く

「場」へのこだわり

- 「総て環境に支配される」
- 「第一に場所が、第二に人が重要になる」
- 「居は気を移す」
- 「古より衣食住といへど、実は住食衣というのが自然の順序なるべし」

資生堂と西洋式ライフスタイルの普及

- 資生堂月報で洋風住宅や店舗を紹介
- 「新生家具協会」を支援。手ごろな洋式家具の販売
- 大船田園都市計画に参画

報 月 第 五 號

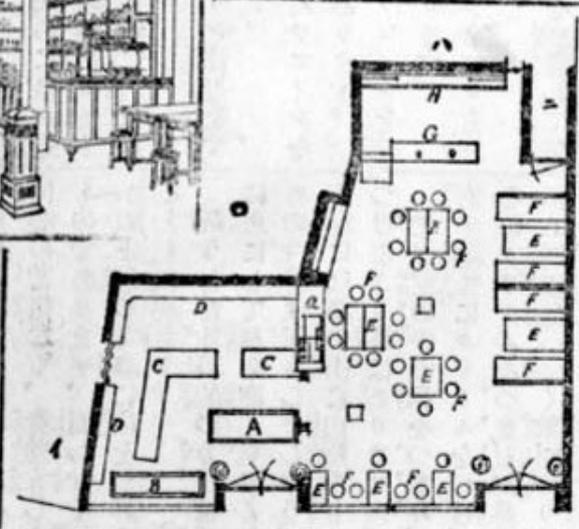


美容 相談所

此月報は資生堂が...
して日頁...の意

やうにしてあります。
化粧品部は、入るま
直ぐ前にショーケース
(A)があります。これ
はお客様が店内に入つ
て直ぐ店員と顔を見合

東京府下大森八景坂下に木
骨コンクリート陸屋根で中央
に店舗四軒其左右に住宅一戸
づゝ附屬の連續
した建築があり
ました。その半
分即ち二軒連
した間口六間、
奥行三間半の店
舗を化粧品
及飲料部の營業
に適するやうに

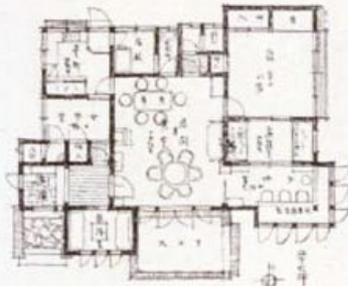


の入口になつて居ます。何れ
もウキンド面より三尺程引つ
込ませて、お客様の入りい

小住宅



家庭團圓主義の家
家族 夫婦子供 四人 女中一人
庭下の全くない能率的な家で廣い居間からこの室へも呼びかけられ秘密の
生じ得ない團圓主義の家です。居間にあるストープは唯一つで家中が暖めら
れ而かも夏は冷たい風が雨か
ら一つはいに這入つて北側
の入口に突き抜ける事が出
来ます。子供寢室は壁にし
ても宜しいのですが二段ベ
ッドにすれば一層簡便です
これは數ヶ所試みた結果決
して不便でなく此の位面積
の經濟と毎日の手数を要し
ない方法はありません。



61

衰退の危機にある銀座一帯(明治末～大正初期)

- ・日本橋の三越が呉服店から百貨店に。
「デパートメントストア宣言」(1904)
「今日は帝劇、明日は三越」(1912)
- ・新橋駅の閉鎖と東京駅の開業(1914)。
お膝元「三菱ヶ原」が丸の内「一町倫敦」として
話題の中心に。
- ・後藤新平の市区改正計画により、銀座の名物と
なっていた柳やレンガが撤去予定となる。

「兎に角、銀座といふものは、東京の商業中枢
区域からいえば少し線を脱しかけてゐることだけ
は否むことの出来ない事実であらう」(信三)



商店連合会と資生堂～銀座は誰のものか？



- ・日本初の商店街連合会
「京新連合会」(現在の銀座通連合会)発足。東京市という「外圧」を前に結束。「銀座の柳」が象徴に

- ・信三は皇太子殿下に謹呈するとして、50名超の著名人から寄稿を得た初の「銀座本」刊行。銀座を越えて銀座愛護ムードを高めた

- ・信三による銀座改革案。

以後、銀座のスポークスマン的な存在になる。

信三の銀座振興策・「共存共栄」と「個性化」

■ 行政との連携

後藤新平からも序文を得、関係の構築を図る。

■ 商店の個性化

「百貨店は普遍化、小売店は特殊化」「一般的なものの一般化は、到底特殊的なものの一般化の力に及ぶべくもない」

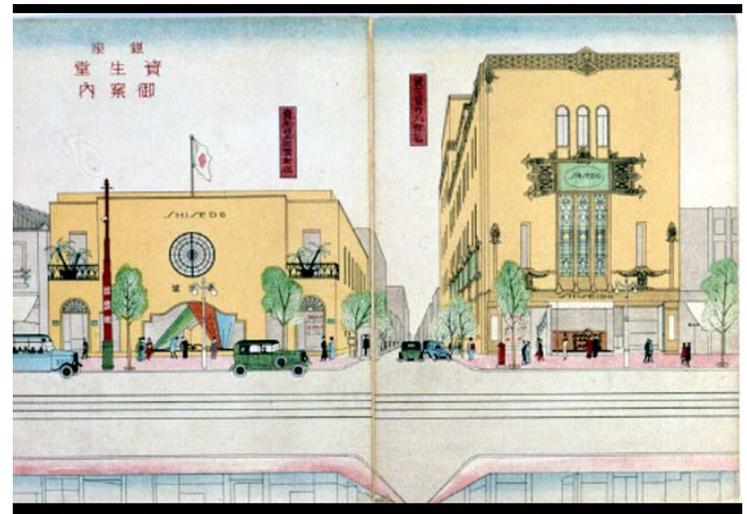
■ 商店連合による共存共栄

建物、ウィンドウ、街灯などの統一化。共同配達や仕入れ、休憩所の設営。「多細胞」たるデパートに対するには「単細胞」たる専門店は連帯が不可欠。日本人に欠如している「共同精神」の重要性を強調。

小売店の集合体として「銀座デパート」化。

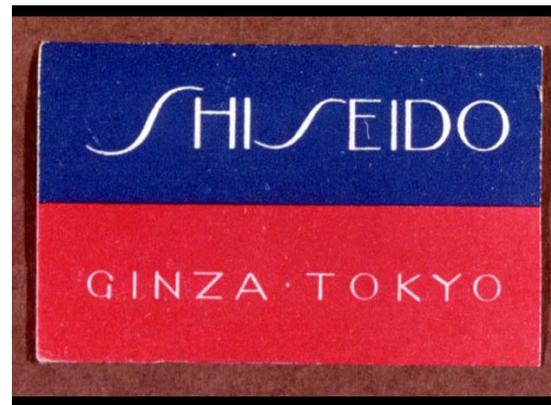
人はいつも「周囲の平凡」から離れて、変化を求めている。
小売商店街も土地の魅力や店舗の工夫で「一つの情趣を帯びさせる
事で人を惹かなければならない」(要約・信三)

誰にでも開かれていて「新婚の若夫婦でも恋人同士でも、気楽に散歩
し、漫歩し得る様な銀座」になれば、銀座は永久に帝都の銀座として
繁栄するだろう



東京新橋資生堂から東京銀座資生堂へ

- 出雲町、尾張町などの旧町名を廃して「銀座」を八丁目に拡大、統一を提案。「一銀座の名称下に抱擁すれば百利あって一害なし」
- 関東大震災後に信三の「大銀座」提案は現実には実現しなかった
- 銀座通連合会は現在も有力な商店街連合会。独自の「銀座ルール」で街の保全をはかる
- 資生堂は「東京新橋資生堂」から「東京銀座資生堂」へ表記を変更



「店舗自体を拠点にした創意的な宣伝」・ギャラリーとパーラー

■ 帰朝者（洋行経験者）をはじめ名士が集う本格的な西洋の社交場としてのパーラー。「第一に場所が、第二に人が重要になる」

■ 女性が安心して入ることができる最初期の喫茶室

「上層階級の方々にコーヒー、紅茶、アイスクリーム等を通じて『資生堂』並びに『資生堂化粧品』の名を深く認識されんことを希うに外ならぬのであります」

「資生堂のイメージをつくってきた旗頭はまぎれもなくパーラーでした」(一部要約・福原義春名誉会長)



資生堂ギャラリー

- ・1919年に開廊、現存する日本最古のギャラリー。
- ・柳宗悦、バーナード・リーチ、竹久夢二、梅原龍三郎はじめ新進画家や商業美術・工芸作家を支援。
 その多くは「遊学」時代の帰朝者ネットワークによる
- ・アマチュアによる展覧会やパリの雑貨販売会など遊び心に富んだ企画多数(渋沢秀雄との「甘茶画会」など)
- ・パリからのファッション雑貨なども展示販売
- ・資生堂製の洋式家具や子供服販売も人気



「資生堂は、銀座の流行に魁け、銀座の趣味を創り、資生堂らしさは銀座らしさになり、本邦流行の尖端を走るものとなりました」
(「資生堂製品目録」1931年)

「僕は資生堂が好きである。ここに漂っている空気が大好きなのだ。このテーブルに坐っていると本当に銀座にしているような気がする」

(安藤更生『銀座細見』1931年)



本日の構成

「個性と普遍性」

序・福原有信と福原信三

1・福原信三の経営理念：
「すべては環境が支配する」

2・福原信三とその時代背景

3・福原信三と意匠：「資生堂調」の確立

4・写真家としての福原信三：
「個性」と「普遍性」をめぐる問い：



「個性と普遍性」をめぐる当時の時代背景

日露戦争後の一等国意識の高揚。一方で「文明ノ程度」として都市環境や住宅問題が注目され、国民性と関連付けて議論される。

「環境問題」は当時の開明的な実業家や知識人層に共通の課題

- ・首都景観問題
- ・「二重生活」による文化的混乱
- ・住環境と「因循な国民性」
- ・「一等国」と社交空間

長期的な歴史を考えるのならば、明治末から大正は日本人の日常性の構造に一大変化が生じつつある歴史的な転換期である

首都景観問題

「(明治以降の東京は)実に雑然として、全然無秩序無整頓の市」
「殖民地のやうな風」(大隈重信)

主に洋行を経験した知識人、芸術家たちからも「つぎはぎだらけ」
「無雑な都」「非美術的」と酷評

「(明治維新から長足の進歩を遂げたが)文明ノ程度ニ付テハ日本人ノ大に注意スヘキ点ナリ。悲哉日本ハ以上ノ諸国ニ比シ甚ダ劣レルヲ見ル」(阪谷芳郎)

日常生活の混乱：二重生活問題

- 大正に入っても都市部では公の場では洋式、私的には和式。
「二重生活」の文化的混乱が問題に。
個人住宅の改良は「刻下の喫緊事」(辰野金吾・1916年)
- 洋式住宅の普及を目的に橋口信助が「住宅改良会」設立。
新渡戸 稲造、佐野利器ら各界から有力者が参加し、機関誌「住宅」発行(1916年)、洋式住宅への関心を高める。
新渡戸、大隈、後藤、加藤高明、細川護立らの軽井沢別荘地開発や田園都市開発、さらに「平和記念東京博覧会」(1922年)の洋風住宅展示場「文化村」が話題になり、「文化住宅」が流行。
- 「(日常生活が)今の様な変なものである時には、自然、我々の思想感情等も世間の狭いものとなり、海外文明諸国からまゝ子扱ひ、骨無扱ひにせられると思ふ」(西村伊作、1916)

「一等国」と住環境、国民気質

日露戦争後、「一等国」に相応しい個人主義そして国民性の涵養が問題に。日本人の気質と和式住宅の関係が深刻に議論される

■個人主義の視点からの批判

時代は**家族主義から個人主義への転換期**、和式住宅はプライバシーのない「**家族主義時代の遺物**」(橋口信助)

■日本人の「因循な気質」が問題化

「欧米人は洋服に靴の軽快な身拵えのうえテーブルに椅子の生活で、起居振舞が頗る簡易に出来るので、自らの心身もそれに伴って快活に動き得られる。

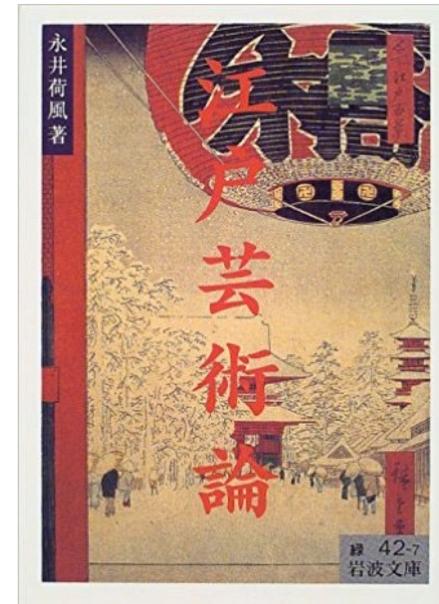
日本人は此処に手数がかかるため**何事も億劫、拳措動作が因循になる**」(対照的な欧米の「立式生活の澆刺たる気分」)

(要約・渋沢栄一、1912年)

「一等国」と住環境、国民気質

「(脆弱で湿度の高い日本家屋では)かつて広大堅固なる
西洋の居室に直立闊歩したりし時とは、百般の事自ら
嗜好を異にするはけだし当然の事なるべし」

(永井荷風『江戸芸術論』1920年)



社交と民主主義

開明的実業家や有識者層は、「一等国」としての外交の必要性からも国民的な社交性の欠如に注目。気軽で形式ばらない洋風の交際様式とともに社交性の涵養と、その前提としての個人主義が不可欠だと考えた。

■ 社交と民主主義

阪谷芳郎はアメリカの簡素だが心地よい交際様式とそこでの「互いに洒々落々たる」率直な意見交換、割り切った議論の様子に感銘。

(民主主義の前提)

新渡戸稲造も日本婦人の形式主義を批判。洋式の簡素な交際様式に基づく「5時の紅茶」を推奨。

「日本女性は黙ってばかりで『魂の代わりに煎餅を出して』いる」



女性の社交空間としての資生堂パーラー

- 「社交性」が新時代の女性の美德に
 - 「芸妓の如き特殊な職業家を交際場裡から駆逐しなければならぬ」
- 外交官婦人を筆頭に「社交界のクイン」が話題
 - 菊池寛『真珠夫人』（1920年連載）のかつての夢も外交官夫人
- 資生堂パーラーは女性に開かれた社交空間として銀座の象徴に
- 一方で、茶道が旧時代の象徴と見なされた
- 渋沢栄一、藤山雷太ら実業家が社交空間整備を通じた「社交の民主化」を推進



竹久夢二 1925年

本日の構成

「個性と普遍性」

序・福原有信と福原信三

1・福原信三の経営理念:

「すべては環境が支配する」

2・福原信三とその時代背景

3・福原信三と意匠:「資生堂調」の確立

4・写真家としての福原信三:

「個性」と「普遍性」をめぐる問い:



資生堂書体と花椿マーク

- 資生堂書体は明代に刊行された道教の教典『太上感應篇』をもとに宋代の『寒山詩集』を参考にして、考案された
- 「資生堂書体は資生堂精神の象徴」



資生堂書体

- 意匠部に入社すると1年間、「文字書き」の訓練
- 「明けても暮れても、まず、資生堂書体の文字書き」(沢令花)
- 「日常の仕事はなく、ペンと黒インキで毎日、資生堂書体を書かされた。これは資生堂美学を感覚にしみ込ませるための訓練で、直線から曲線に移るカーブが一番難しく、『日本刀の反りの緊張感』だと、また『気品を与えるにはひとつ腰高に書く』ことも教わった。後年広告のレイアウトを始め、どうしても資生堂らしくならず困った時、このことを思い出し応用するとたちまち雰囲気が出て、なるほど伝統とはそういうものかと深く感じ入った」(太田和彦)

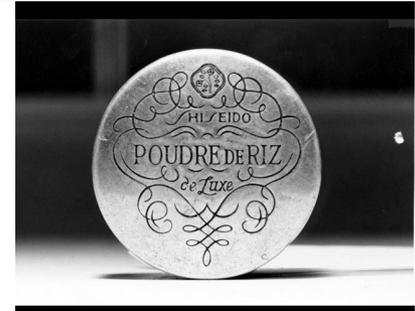
花椿

- 信三が、ヨーロッパ遊学時に接したデザインをもとに原案をつくる
- 「これ以上なにかをそぎ落とすことも加えることもできない意匠」



唐草模様

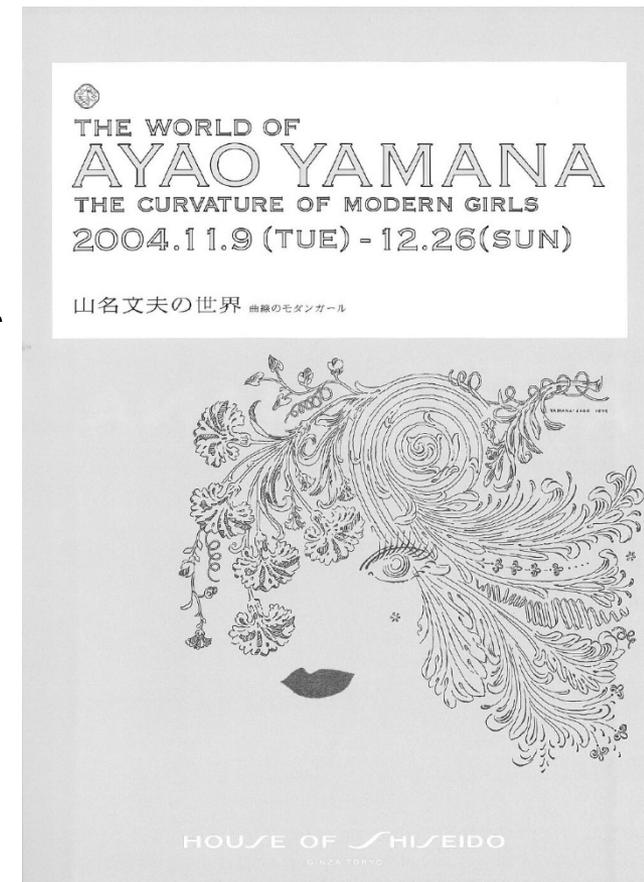
- 古代より時空を超えて継承されている意匠として選定



山本武夫「唐草の動きというものは簡単に出来るようで出来るものじゃないんですよ。これは一種の修行ですよね」

山名文夫「そう、よほど時間をかけてデッサンを続けていないと出てこないんですよ」

資生堂を象徴するシンプルにして体得に「修行」を要するデザイン三要素



アートディレクターとしての信三



- 商品をしてすべてを語らしめよ
- ものごとはすべてリッチでなければならない
- 本当に優れたものには恒に生命がある

福原社長がすべての宣伝物に目を通し、決定したのである。資生堂の宣伝物には、ひとつのはっきりした個性が出来ていて、一見しただけで、だれの目にもすぐ分かった。こうしたデザインやレイアウトのスタイルは、だれがつくったというよりも、そのとき、そのときのデザイナーによって試みられた、ハイセンスのデザインが福原社長の好みのもとで、淘汰され、洗練され、昇華され、そのスタイルをつくりあげてきたものと考えられる





SHISEIDO

過酸化水素粉歯磨

使用中に過酸化水素が作用しますから
歯を白くするばかりでなく
其保健を助けます

また匂ミ味には資生堂獨特の
新鮮な趣きをもつて居ります

資生堂

1920年前後の資生堂製品のレーベル



本日の構成

「個性と普遍性」

序・福原有信と福原信三

1・福原信三の経営理念:

「すべては環境が支配する」

2・福原信三とその時代背景

3・福原信三と意匠:「資生堂調」の確立

4・写真家としての福原信三:

「個性」と「普遍性」をめぐる問い:



写真家としての福原信三

- 幼少時から写真に親しむ
 - 1908年 コロンビア大学薬学部に留学。1913年帰国
 - 1915年 資生堂の経営に参画

 - 1921年 写真芸術社を設立。『写真芸術』誌を創刊
 - 1922年 初の写真集『巴里とセイヌ』を出版
 - 1923年 『福原信三写真画集 光と其諧調』を出版
 - 1924年 日本写真会を結成し初代会長に就任
 - 1926年 写真専門の月刊誌『日本写真会々報』を創刊
- 以後、作品と共に写真論、エッセイ、作品批評などを発表

“信三の「写真による芸術」の提唱は絵画芸術の模倣に流れがちだった従来の写真観に一石を投じるものであった”

(日本写真界HPより)

写真家としての福原信三

- 信三は草創期の写真芸術の大家
七冊の写真集と二百を超える写真論を発表
『光と其諧調』 写真の本質を光のグラデーションに還元
- 「個性化」を芸術の要諦として捉えていた
(「個性の追求」が普遍性につながり、時間をも超越する)
- 「俳句写真論」提唱
- 洋行を契機にした個性への関心が、ベルクソンや西田幾多郎に影響されつつ信三独自の芸術観として確立
- 写真を通じた芸術観は資生堂の経営にも反映

※以下の写真作品はすべて日本写真会HPより引用

「釣り」(1913年)



博労(1913年)



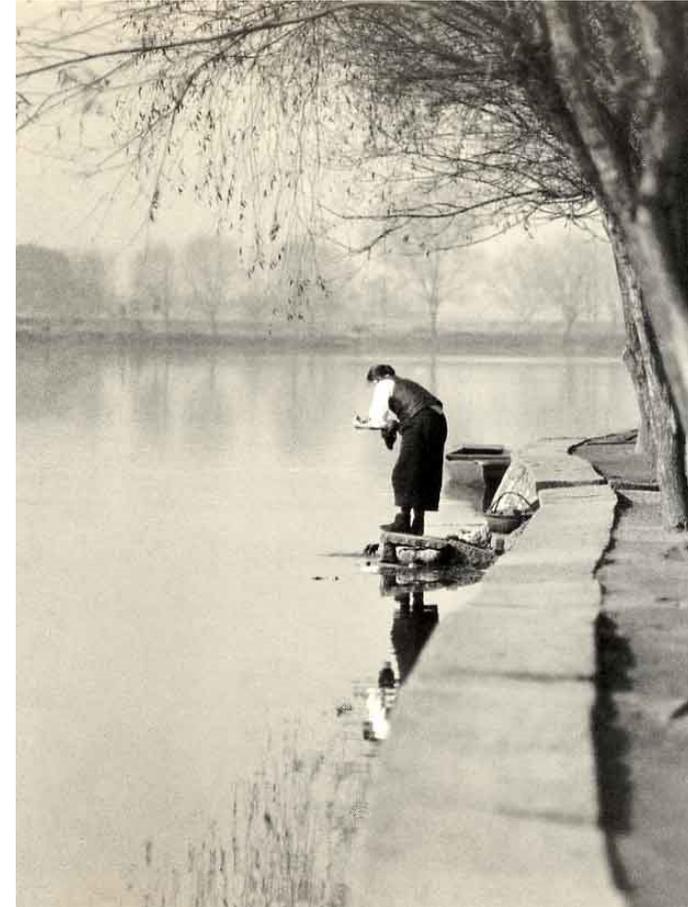
三千院(1924年)



不詳(赤倉)



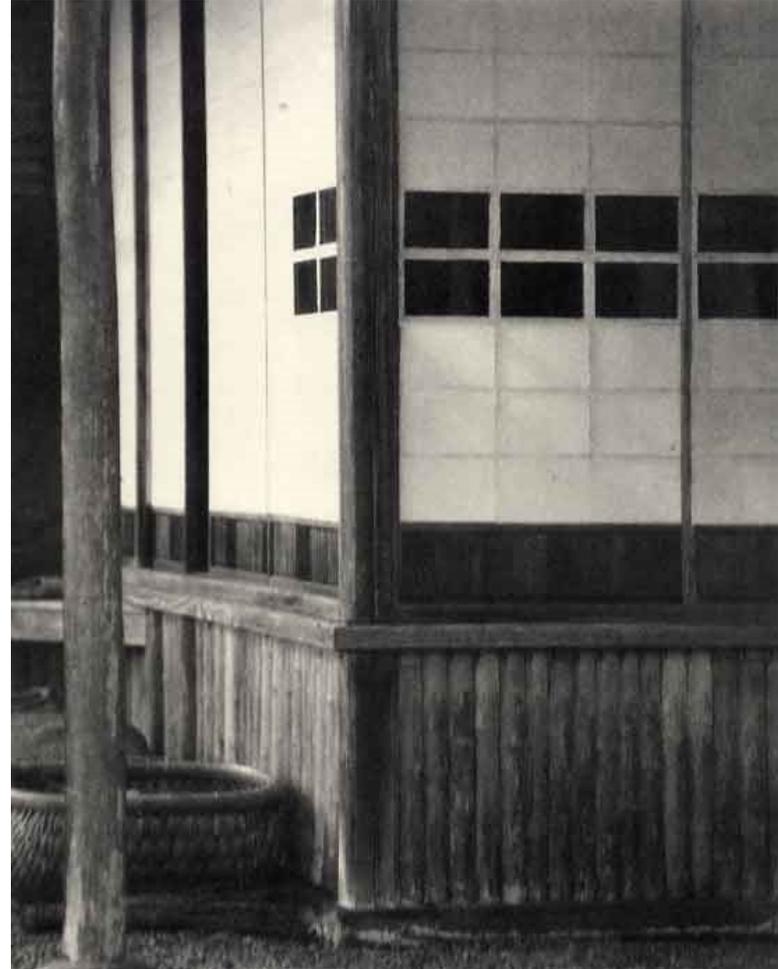
『西湖風景』(1931年)



『松江風景』(1935年)

ヘルン旧居

有沢山荘



信三と写真 「八面玲瓏な個性」

「個性」は信三の考える写真芸術の要諦をなすもの。写真を芸術の領域にまで高めたためには撮影者の個性の涵養が不可欠だと考えた。

- 一九二〇年代に小型カメラが流行し、写真を趣味とする人々が急増。信三は『資生堂月報』で頻繁に写真を取り上げ、コンクールなども開催。よい写真の撮り方について、「まずは個性を伸ばすこと」と強調。
- 「連続誌上映画の挿絵式の誰れが描いても特徴などない甘いのが、下らないお体裁を飾り、選者に迎合したりする様な態度や、技巧を凝らしたものなどより、七癖、四十八癖、曲がつたつむじ何でも堂々と出したものの方がいいのです。癖もつむじも何時か八面玲瓏な個性になりますのは、泥水も澄む時が来るのと同じですが、ただ生来の悪水は仕方がなく嚴重に区別される訳です。無邪気、純真、無技巧、無作為が大切です。自然と同化して無我になつた時は屹度四十八癖が出るでせう。遠慮なく出して頂きたいものです」。

「八面玲瓏な個性」とは、特殊性の追求の結果としての単純化による、
普遍性につながる個性のことを指しているのではないか

信三と写真 「大乘の個性と小乗の個性」

- 個々の作品に違いがあるのは当然で、個性すなわち芸術ではない。単純な差異を「小乗の個性」、それに対して芸術にまで昇華された個性を「大乘の個性」。
- 後者に至るには人格の鍛錬も必要。

信三と写真 「眼の後にある心」

■芸術家には「美しさを他と区別されるに足る様に見ることが能きる眼」すなわち「眼の後にある心」が重要で、**芸術家は「濾過器乃至は篩ひでなければならない」。**

水が濾過されて澄んでいくイメージを好む。

■「網目がしつかりして居さへすれば」、心境もおのずと伝わる芸術作品となり、「**流行を追ふ様な醜体**」を呈すこともない。

■「ただある形、構図ばかりに心をひかれますと、**其形を写し撮ると同時に自分が其形の中へ入って終って、大変窮屈なものが出来やすいように思はれます**」

信三と写真 「サムシングの描出」

■信三が写真芸術に本格的に傾倒したのは、パリ滞在が契機。「自分の感じた美しいパリの印象」を表したい。

「自分の創作欲を写真及写真術を借りて表現しなければ、或物(サムシング)は描出し得ないといふ一つの新しい動機」をもって撮影するようになった。

■信三にはなによりも、この「或物(サムシング)」が大事。それゆえ単なる模倣には厳しい。

「何処迄も個性に徹する様絶えず努力を払う必要がある。易行をやる事は殻を作る事である」。

信三と写真 「主客一致の合一境」

- 「私は始終写真家に対して自然に接する事を極端にまで勧めて居る。写真を写す為ではない。むしろ写真の事などは忘れて欲しいのだ。仰向けに草原に寝転んで終日雲を見て居たまへ。川岸のイむで終日土の香を嗅いで見たまへ。其の翌る日も、其の次の日も。雨が降ったら終夜雨垂の音、雨が土に浸み入る音を聞きたまへ。そのうちに段々自分の心が澄んで来るのが判る。同時に浪の音、風の音、雨の音以外に自然が屹度何か話しかけるのを聞く。今迄見た事もない不思議を見せて呉れるに違ひない。自然が神秘の扉を開いて呉れるのだ。喜びの溜息をつく毎に脈管の血が溢れる。大きな声で何ものかに叫びかけたくなる。跣足で駆け出したくなる。踊りたいのだ、唄ひたいのだ。溢れる喜びを何かの形で現したくなる衝動にかられるのだ。此の心持を作曲すれば音楽となり、歌へば詩となり、描けば絵画となり、写せば写真となるのである。ひざまづいて天の栄光を讃めれば神の道も見るであらう。この心なしではどんな芸術も味ふ事が出来ない。内容があつてから形式が現れる総ての芸術皆同じで、さうして内容即表現の一如に行かなくてはならない」

信三と写真 生命の躍動

- 写真は芸術であるかないかといふ事は、芸術が生命の躍動の表現であるとして、写真に由つて吾々がそれを表現し得るか否かによつて定まつて来る。
- 「自然から美感を直観するのが第一義で、表現が第二義である」

信三と写真 俳句写真論

- 「美しい光と影の調子に思はず『アツ』とひれ俯しました時、写真はその後の十六文字を芭蕉翁の句における『あらたふと青葉若葉の日の光』とつゞけて呉れたのでございます」。
- 光は季語のかわりで、それを写せば光の詩となり、「どんなスパーク的な印象でもスパーク的に写して、時代にふさはしいスパークの詩をうたへる」のである。

信三と写真 技術の進化

- 技術の進化にはきわめて柔軟。芸術の表現方法は科学の進歩に大きく依存しているが、そこで常に問われるのは**芸術的思想の有無**。
- もしもレオナルド・ダヴィンチが現在に蘇ってカメラに触れたならば、写真を芸術の域にまで引き上げるだろう。しかし技巧に囚われるだけならば、「例へば絵画に於てはペンキ画となり、看板絵となり、写真に於ては記念写真となり、記録写真に終るのみである」。

個性と普遍性

- 個性を極めた結果の、普遍性を備えた「八面玲瓏な個性」
- 「流行を追うような醜態」は不可
- 自然と一体化した「主客一致の合一境」と「サムシング」の描出
- 一瞬の感興を表現するという点で俳句と写真の類似性を指摘。国民芸術としての俳句に注目し、こうした国民性を涵養した日本の風景に注目。

資生堂意匠部関係者らの回想

- (信三が鈴木春信を好んだという点に関して)
「(自分も)ビアズレーに衝撃を受け、ロゼッティに回り道をして春信を知った。いまは「国籍のないような女の顔」を描いている(山名文夫・要約)
- 「春信はまことに最小の主題によりて最大の効果を得べき芸術の秘訣を知りたる画家たりしといふべし」(永井荷風)
- 「個性のない女」を描きたい。そして「個性のない表情のなかにかすかな情感を現したい」(小村雪岱)
- 「文案にしても図案にしても、言葉を惜み、色彩を惜み、通俗を回避する」
「所謂一般向のしないもの」(高木長葉)

「経営に美学が組み込まれているか」

- 福原信三は、環境をすべての決定因として重視する独自の理念のもとで、「東京銀座資生堂」とのイメージの構築に積極的に関与し、強力な企業イメージの形成に成功した
- それは同時に明治の第二世代でもある福原が、経営そして写真家としての活動を通して「個性と普遍性」という課題を追求していく過程でもあった

ご清聴ありがとうございました